

# 19世紀学研究

研究代表者 松 本 彰

## 1. 参加メンバー

松 本 彰 (代表)  
石 田 美 紀  
井 山 弘 幸  
金 山 亮 太  
城 戸 淳  
桑 原 聡  
佐々木 充  
鈴 木 正 美  
高 木 裕  
高 橋 秀 樹  
錦 仁  
逸 見 龍 生  
細 田 あや子  
三 浦 淳  
宮 崎 裕 助

## 2. プロジェクト内容概略およびプロジェクトの進捗状況

平成22年度は、以下の通り、シンポジウムを3回開催した。

### シンポジウム

1-1 「音楽におけるコメモレーション——18, 19, 20, 21世紀の音楽と社会」(2010年7月10日)

〔概要〕2009年はヘンデル没後250年、ハイドン没後200年、メンデルスゾーン生誕200年であり、これらの音楽家たちが活躍した国ドイツで

は、様々な記念行事（いわゆるコメモレーション）が行われた。松本彰（新潟大学人文学部教授）が、それらの行事に参加した経験もふまえつつ、18世紀以降300年間の音楽と社会の関係について、次のように論じた。

18世紀（ヘンデルとハイドンの時代）には、音楽はまだ「芸術」ではなく、政治や宗教の儀式、祭典などを盛り上げるために用いられた。19世紀（産業革命と市民革命後の世界）にはコンサートが一般化し、コンサートホールにふさわしい交響曲が大オーケストラで演奏され、ドイツは「音楽の国」になっていく。20世紀（大衆の時代）には、録音技術の発達により音楽を楽しむ聴衆が増加し、「娯楽音楽」としてのポピュラー音楽と「まじめな音楽」としてのクラシック音楽や芸術音楽とが区別されるようになっていく。そのような中で、21世紀に入った現在、19世紀に成立した「コンサートホールにおける芸術音楽」という理念が根底から問われることになった（例：ヘンデル・オペラの復活、チェンバロなどのオリジナル楽器演奏の復興）。つまり、21世紀になって「自由で平等な市民」の築く「市民社会」は、理念ではなく、現実のものとなろうとしている。「自由で平等な市民」の精神は政治や経済だけの問題ではなく、「文化」の問題でもある。グローバル化の中で、さまざまな民族の文化を偏見なく捉えることが重要となっているように、歴史においても、さまざまな時代の、さまざまな階層が音楽を楽しむ、柔軟で鋭敏な歴史意識、美意識を持つことが求められている。

## 1-2 「ミュージアム論——ミュージアムの現在」（2011年1月22日）

〔概要〕ミュージアムという制度は、そもそも19世紀から20世紀にかけて全盛を誇った啓蒙学習空間であり、19世紀に諸科学・諸学問が自立するのと並行して発展した。しかし、遅くとも20世紀末から、新しい学知が求められているのと呼応して、ミュージアムも新しい形を模索しているようである。今、ミュージアムに何が求められているのか、

その理由は何なのかを考えようというのが、本シンポジウムの意図であり、ここでは次のような報告が行われた。

安川晴基氏（千葉工業大学助教）は、「歴史博物館と集合的記憶のマッピング：ドイツ歴史博物館，ベルリン・ユダヤ博物館，〈テロのトポグラフィー〉」と題した講演で、20世紀末からベルリンに開館した三つの博物館をテーマに、それらがどのような背景で、何を目的として建設され、また、どのような議論があったかを詳細に論じ、歴史博物館と他の二館との建築デザインの違いがドイツ人の集合的アイデンティティ、自らの過去の想起の問題と密接に関わっていることを指摘した。

荒井直美氏（新津美術館学芸員）は、「新潟市新津美術館13年の軌跡」というテーマで、1997年に開館した新津美術館に当初から学芸員として携ってきた経験をもとに、地方公立美術館の限界と可能性とを論じた。アーティスト・イン・レジデンス活動によって地元の人々との共同作業、あるいは学校などの施設に出前美術館を行うといった試みを通して、「価値を創造する機能体」としての美術館を目指している様子の紹介がなされた。

大倉宏氏（新潟砂丘館館長）は、「住まい・画廊・美術館」というテーマで、観る人と絵画を近づけるための試みとして日本家屋に絵を「飾り」、それを「画廊」とするコンセプトを紹介した。それは、新潟の下町の町屋という、次第に取り壊され数が少なくなっている場を、あえて記憶の場あるいは場所の記憶として絵画と融合させるという自身の試み（例：住まいが一階、画廊が二階、美術館が三階という美術展示三階論）として実践されている。

### 1-3 「裂開する世界図絵近代——ヨーロッパの〈庭園〉表象における欲望・創出・媒介」（2011年3月10日）

宇宙や世界を人間的なサイズに転換したかたちで再現＝投影する〈鏡〉の装置としての「世界図絵」Orbis pictus には、百科全書のような

な事典のみならず、博物誌、ミュージアム、そして庭園術などの知の形態や制度、メディア、空間なども含まれうる。では、19世紀における近代への転換期、古代から近世に至るまで保持されていたこの知のシステムにいかなる変容が見られたのか。こうした問いをテーマにした本シンポジウムでは、以下のような報告が行われた。

安西信一氏（東京大学文学部教授）は、「コテージ・ガーデン——内向するイングリッシュネス」と題して、19世紀における英国庭園の事例を取り上げた。18世紀の開放的かつ拡張的なイギリス式風景庭園の流行ののち、19世紀にはそれとは一見するとまったく逆の特徴を持つ、懐古的で静謐なコテージ・ガーデンが、英国の本質を表象するものとして国民生活のなかに根付いていった。コテージ・ガーデンが英国の「想像上のアイデンティティ」としてのノスタルジックな価値を徐々に獲得していく軌跡が、同時代の言説分析を通じて明快に描き出された。

鷲見洋一氏（慶応義塾大学名誉教授・中部大学教授）の報告「直接性から間接性へ——表象領域の変容と転換」は、19世紀からの知の転換のパノラマを様々な領域に通観し、これを「間接性」をキーワードに読み解いた。身体、政治、経済、絵画、音楽、文学、伝達メディア、空間・時間・世界意識といったカテゴリーにおいて、アンシャン・レジムまでの近世ヨーロッパの諸価値が、19世紀近代を経ていかに転換したかを、多くの映像を使用しながら検討した。